

井深大 連続対談

“できる”ことは楽しい

赤ちゃんは歌が好き

井深 先生のところでは、どうしてお子さんを幼稚園へやられなかったんですか。

熊谷 主人が教育学をやっており新聞記者もやっております、自分の子どもにも少し変わったことをやってみたいな、と思っただけなんです。私は主人の言うことはいはいと聞いて、今のウーマンリブとはちょっと違うんです（笑い）。

それで幼稚園にやらないで、また、私自身が英語が好きだったんです。高校時代も、山陰地方の英語の弁論大会の代表でスピーチをしたりとか。

井深 それじゃ、発音だって自信があるんですね。

熊谷 そんな大したことないんですけど。

まあ、そんなことで英語が大変好きでしたが、父親が数学の教員で、お父さん子だったものですから、4歳ぐらいの小さいころから、鶴亀算をさせられたりして、自然に数学が好きになっていて。音楽も子供のころから好きでやってました。

井深 ああ、そうですか。

熊谷 中でも数学は小さいときからやっていたから、あんまり勉強しなくてもいい評価だったんです。ですから、数学科に進めば音楽もできると踏みまして、音楽と両方勉強いたしました。何に進もうかと困ったぐらい、あれもこれも好きなものが多くて、英語もその1つ、好きな教科だったんです。

井深 数学は専門にやられたわけですか。

熊谷 そうなんです。

卒業してから、高等学校などで数学の教師もしましたが、今は音楽が本職になってしまいました。

現在、湘北短期大学の幼児教育科で音楽を指導していて、幼児の数指導ですね。数概念の、それを音楽を使ってやればいいのかという研究をしまして…。

子供ってというのは、井深先生がおっしゃったパターン・ラーニングに音楽を使うと、大変喜んでクイックしてくるというか、自然に体に入ってくる。

だから英語の教育なんかも、音楽を使えば英語の歌で、手遊びしながら、丸ごと英語の発音や中身も覚えちゃう…。

井深 それは、英語だけじゃなしに、中国語から何からみんなやれる…。

熊谷 だから、適当な教材をつくるのが非常に大事になると思うんですけども、例えば英語

の場合は、アメリカやイギリスで歌われている童謡というか、子供の歌をもってくればよろしいと思いますから。

井深 それはちょっと本気でやるべきじゃないかなあ。

熊谷 そのテープを各家庭でお聞きになれば、お母さんがもし英語の好きな人だったら、お母さん自身が喜ぶと思うんですね。お母さんが喜んで歌ってれば、子供も一緒になって歌えるでしょう。

周りの人が喜んでやっていると、子供というのは、それこそ勘で、これはおもしろいものらしいなと思って、一緒になって楽しむ。

井深 それはどこもやっていなかったねえ。

熊谷 0歳から1歳半ぐらいの赤ちゃんとお母さんに音楽の話をしてくださいって言われると、ただ音楽のお話をしただけではつまらないから、赤ちゃんに歌を歌ってあげるんです。すると、もうお母さんよりも赤ちゃんのほうが感動して聞いてくれるんですよ。それがもう私はうれしくてね。

井深 そうですか。

熊谷 ええ。で、保育園なんかでも童謡じゃなくて、私の好きな『この道』だとか『浜辺のうた』とか、日本の歌曲を歌ってあげるんです。そうすると、0歳とか1歳の子供は本当に感動した顔で、聞いてくれます。

5歳ぐらいになると、照れくさそうにするんです。知らないおばちゃんが、大きな口を開けて歌い始めて何か恥ずかしいという感じでね。

年齢が小さいほど、喜んでにこにこして。

ですから、歌っているのは小さい子供ほどいいんじゃないかしらと思います。

井深 小さい子供だけじゃないですよ。

この間、私の満79歳の誕生日に、ボニージャックスがわざわざ、箱根のうちへ来てくれて私の好きな歌ばかり選んで、1時間くらい歌ってくれたかなあ。もったいないって気がしたなあ。みんなにこれ聞かせたらと思って。

だから、79歳になっても感激しますよ（笑い）。

熊谷 ですから、幼児に何かお勉強的なものを教えると思うと、失敗すると思うんですね。情操教育の一環として、歌を使って知的なものも入れていくという方向でいけば、非常に心の優しい子供に育つのではないかと思いますけど。

井深 情操教育なんて言葉を使っちゃいけないんですよね。

熊谷 ええ、そうですね。わざわざ情操教育をしようと思って音楽を与えるんじゃないってね。

下地は胎内から

井深 そうなんです。自然にそうってなきゃいけないんですよね。

で、お一人？お子さんは。

熊谷 2人です。3歳違いで、上が男の子で、下が女の子です。

井深 そうですか。今、お幾つなんですか。

熊谷 上が28、下が25です。もう社会人になりましたから。

井深 それで、どういう育児方針でやられたんですか。幼稚園へあげられなかったところから。

熊谷 結婚してすぐ子供ができて、主人は当時毎日新聞の記者をしまして、新潟支局に転勤になりましたものですから、私も仕事をやめて新潟に行きました。で、新潟で長男が生まれました。それで、長男が5歳になるまで家で育てました。

母乳で育てたりとか、ということができたのも、今考えると、ああよかったなと思うんですけど、東京で仕事を続けてたら、そういうことはできなかったかもしれないと思います。人生分からないもので…。

でも、子供は自分の手で育てなさいというのが、主人の願いだったんです。

井深 それで、英語とレコードの話は、5年前拝聴したのですが、ほかのことはどんなことをやられたんですか。

熊谷 英語だけに絞って、あとは、自由に遊ばせておりました。

でも、自分で百科事典から片仮名は覚えました。大変興味を持ってました深海の魚、デビルフィッシュとか、いろいろ小さい字で日本語で書いてある。これ何、これ何って聞くので読んでやると、それで片仮名を…。

それから、動物の図鑑。小学生が読むような小学館の図鑑なんですけどね。ステゴザウルスとか、いわゆる恐竜が出ていて、それに興味を持ったんです。そういうのでやっぱり字を覚えた。繰り返し繰り返し、これ何って聞くのを読んでやると、それで…。だから、それも勘によるパターン・ラーニングですね。この絵とこの絵の、この字が同じだからというぐあいに覚えたみたいです。だから、教え込むことはほとんどなかったんです。

井深 やっぱり自分で。

熊谷 ええ、自分で意欲を持って。

それから、英語については、4歳になったときにレコードでやり始めたんですね。これはきちんとやりました。

井深 本当の教育を始めたんですね。

熊谷 その前にも、どこから出たものだったか 『虹の七色』という表紙になっていた7枚のソノシートで、英語のお歌とご本とついたのを、小さい、それこそまだ2歳ぐらいのころに与えたら、それがお気に入りです。毎日その歌を、英語の本をめくりながら聞いてました。

井深 それじゃ、下地がだいぶできていたんですね。

熊谷 ですから、いきなり、さあ英語やりましょう、じゃなかったんですね。

井深 普通は英語というものには馴染みがなくて、とっかかりが大変なんですよ。

熊谷 アメリカ放送をいつも流して、それこそ胎児のころも英語を聞かせておりましたし、そんなんで、英語の勉強を始めるという前に、かなり自然な形の下地は…。

井深 そうでしょうね。

で、ある日いざと、開き直って始まったわけですか。

熊谷 ええ、喜んでやりました。

井深 1日何時間ぐらい。

熊谷 そうですねえ。それこそ英語だけに絞ってましたから、午前中、ほかの方が幼稚園に行っている間、遊びながらやったんですけど、今考えてみると、夕食が済んだときもやっていたようですし…。

井深 喜んでやるわけですね。

熊谷 ええ。自分でレコードをかけたりして、それに合わせて一緒にしゃべってましたから。

井深 それで、どのぐらいのピッチでやったんですか。

熊谷 1回にかなり時間がかかったと思うんですね。記録を取ってなかったんで、ちょっと正確には分からないんですけど。最初の1週間めぐらいは何となくうろ覚えで、10日ぐらいになると、はっきり分かって、2週間たつと、もう自分のものにしてしまう。

井深 自分のものっていうのは、もう意味も何も…。

熊谷 全部分かって。だから、私は小さいお子さんに音楽を聞かせるときも、2週間は同じ曲を聞かせなさいよって言ってるんですね。自分の経験で。

井深 だけど今の中学生なんて、その程度にちゃんとつかんでますかね。どんどん進んでいくけど。

熊谷 ちょっと分からないんですけども…。幼児っていうのは、初めはゆっくりなんですけれども、ある程度、覚えるコツを分かってくると早いんですね。

井深 2週間というのは、新しいことに対してですか。

熊谷 1つのレッスンですね。ですから、初めは非常に短いセンテンスを2週間でやっていく。次は、長いのも2週間であげちゃうっていうぐあいになって。テキストは中学生用のを使いましたから、だんだん学年が上がってまいりますでしょう、中1、中2と。センテンスも長くなって。それも2週間たてば、自分のものにしていくっていう感じです。

井深 初めはレコードで何回でも聞くわけですか。

熊谷 ええ。そして、進んでいっても初めから全部流す…。

井深 それで、その訳とかはお母さんが説明されるんですか。

熊谷 私は試行錯誤でどうやっていいか分からなかったんですけど、例えばジス、イズ、ア、ペンのジスだったら、「これは」っていうぐあいにして、1つ1つの単語の意味も分かるようにしました。

そして、字も書きましたけれども、4歳ですから。

井深 それで、ずうっとテキストに従って、どんなステップであげられました。

熊谷 ちょっとそこら辺が、もうはっきりしないんですけども、はっきり言えるのは、2週間ぐらいで課を進めたということですが…。

始めたのは…幼稚園にやらないと決めたときからですから、ということは、多分4歳になったばかりだと思うんです。

そして、5歳になるまでにはブックは全部やっていたと思うんですよね。ブックは5歳ぐらいになってからじゃないかと思うんです。

5歳の3月まで続けて、4月からは鳥取県に住んでいる主人の両親のところに子供を預けて、私は仕事を再び始めて。でも、それはたった4ヵ月しか続かなかったんです。私が我慢できなくなって、すぐ迎えに行きまして、5歳の夏休み過ぎてからは幼稚園にお世話になりました。

井深 ああ、そうですか。

熊谷 やっぱり、子供を手元から離すっていうのは、母親として非常に生活が不安定になるんですね。一方、年をとった両親は2人も子供を預かると大変ですし。

井深 ああ、妹さんも預けたの。

熊谷 ええ、フルタイムで仕事を始めましたものですから。で、2学期からは非常勤の講師にさせていただきまして。私が学校へ行っている間だけ幼稚園にお願いして、大急ぎで迎えに行くっていう生活に戻ったんです。

小学生になってからは、鳥取から両親に出てきてもらいまして、一緒に暮らして、子供を見てもらって、私は働かせていただいたんです。

なかなか、子供を育てるのには苦労いたしました。

“できる”ことは楽しい

井深 もうブックなんかへいったら、自動的に動いていくんでしょうね。

熊谷 そうですね。あとは自然に覚えられます。1巻の最初あたりに時間はかかりませんが、

井深 要領、ノウハウを身につけるまで。

熊谷 はい。あとは時間の問題で。ただ、こんな中学校の教科書をやるのだけがいいことではないと思います。私の場合は他になかったし。でも使ったテキストに結構歌が入っていたんです、『オールド・ブラック・ジョー』とかね。そういうのが一番楽しかったです。

井深 音楽として入っているの？

熊谷 はい。歌がテキストの中に。

井深 レコードは何枚ぐらいですか。

熊谷 1冊の本に、4枚ぐらいです。LPで、裏表になっている。

井深 ああ、ソノシートですね。それでね、もう一つ。英語は小学校に入ったときはすっかり身についちゃいましたね。

熊谷 さあ、そこはちょっと自信がないんですけど。

小学校時代には、ラジオ基礎英語を自分で聞かせましたから。せっかくやったものだから、忘れないようにと。

井深 中学校に入ったら、どんなふうだったですか。早期教育やると、みんな知ってることばかりでばかばかしくなっちゃうから、早期教育をしちゃいけないんだという説も非常にある

んですよ。

熊谷 それはなかったですね。岡潔先生っていう数学の先生、あの先生に私は非常に感銘を受けまして、人を先に自分は後にという日本人の美德があると。そういうふうに育てたい、と子供たちにそういうぐあいにしたものですから、自慢したりとかよりも、むしろ引っ込み思案というか、特に娘のほうは人様を先に自分は後にというような感じで。二人とも学校が好きで。ぐずぐず言ったら、学校行かなくていいって言うと、一番それが怖くて、泣き出してしまう（笑い）。学校に行きたくて、行きたくて。それで、中学に行ってたころの授業で、つまらないとかそういうことは一切言いませんし、楽しかったんじゃないですか。子供っていうのは、自分ができるということは非常に楽しいことですから。

井深 私はそれを主張しているんですよ。子供はきれいに早く決まった時間にやれるという達成感で非常に満足するんですよ。

熊谷 ついこの間、新聞に、計算はいいけれども、日本の子供は文章題がだめだと。あれはやはり数学教育で文章題を解くパターン・ラーニングをもっとさせれば・・・。

最適時期を逃さずに

井深 そうね、私はうんと早くパターンの時代に、パターンだけで機械的にやることをしっかり身につけると。それは、音楽をやっていて、きちっとした音階を身につけると同じことだと思うんですよ。それで漢字でも、わざと絶対に意味を追求させないで実験しました。「臥薪嘗胆」だの「八面六臂」なんていうのを1歳何ヵ月の子に教えてるんですよ。意味を教えようたって、八面六臂なんて教えられないですからね。いつの日にか、大人になったときに、ああ、こんなことが出てきたという・・・。

熊谷 ああ、私も思い出しました。主人がね、論語をやりなさいと言って、大分論語をやりました。下の子にもやりました。その意味は後から分かればいいんだということでやりました。

井深 何歳ぐらいからやられましたか。

熊谷 小学校1年ぐらいですね、上の子が。で、下の子が、そうすると3歳ぐらいですね。一緒にやったことを覚えています。

井深 だから文章題なんてね、後でいいと思うんですよ。

熊谷 でも、文章題ができないっていうのは、高学年のことですからね、小学校の。それができないということは、文章を読み取る力が養われていない。

井深 それは別の話なんですよ。数学じゃないんですよ。

熊谷 そうです。数学じゃないところで。でも、文章題を読み取る力は国語の力ともちょっと違って、数学独特の表現方法があるんですよ。それに慣れるかどうかなんです。

井深 今、中学校の1年生でテストして、分数の意味が本当に分かっている子供っていうのが非

常に少ないといえますね。

熊谷 そうですか。

井深 それはどうしてかっていうと、分数の意味を教えようと思って、小学校の先生はやっきになって、一生懸命勉強してるんですよ。なぜそうするのか、という意味を分からせられなきゃ数学じゃないという、そういうことから出発して、それを解き明かすためにいろんな苦労をして、それでなお分数が分かんなくなっちゃってるの。

熊谷 ああ、かえってね。

井深 だから、機械的にどんどんやっていって、後からそれはこういうわけだって自分で証明できるぐらいにしちまえばいいわけなんですよ。数学の好きな人でも、分数になってごちゃごちゃになっちゃってるという統計が出てますね。

熊谷 確かに、先生がおっしゃるように、幼稚園時代ぐらいで数の足し算、引き算、掛け算、割り算、十分できますから。

井深 私は、2、3歳で、掛け算の九九をやっちゃおうとって、今考えているんですよ。その機械的なものが入るといって時期を人類は怠ってきた…。

熊谷 先生、それを歌でやるといいんです。私ね、作曲してやりましたの、歌を使って覚えるのを。とっても楽しくて、リズムにのって答えちゃうんです。

井深 二けたの掛け算幾つになるとか。

熊谷 二けたの掛け算はちょっとやりません、簡単なのしか(笑い)。子供って数のこと好きなんです。

井深 そうなんですよ。

教えるよりも意欲を引き出す

熊谷 私、いろんな研究のために数の絵本ていうのを持っているんです。それで、家に遊びに来る子供たちが、真っ先に取るのはその数の絵本で、だから数の絵本がいつも破れたり、ぼろぼろになるんです。

井深 漢字カードだってね、たくさんある中で、好きなのは真っ黒になってるんですよ。

熊谷 そうでしょう。だからね、特に幼児教育で大事なものは、教え込もうという姿勢をすると、もう子供は横向いてしまうと思うんです。自分から意欲的にというところをねらって教育しないと、失敗しますね。

井深 最初はお母さんが引っ張って行って、むしろジェラシーを起こさせるぐらいがいいんですよ、子供ってというのは。

熊谷 でも、何か難しい漢字だけをこういうぐあいにして見せるよりは、私の考えですとね、物語を毎日読んで聞かせて…。

井深 いや、その前にね、パターンていうのは、まずお母さんの顔を覚えるんですよ。生まれて5、6カ月の赤ちゃんが。パターンとしてインプットする時期っていうのがあるんです

よね。機械的なインプットというものでね。

我々は日本語を知らぬ間に植えつけているでしょ。これはもうパターンばかりなんです。そこに情緒とか、芸術とか、そんなものはまだないわけなんですよね。

だから、漢字のようなパターンは、2歳、3歳のときにワッとやっておこうと。漢字が大好きという主体性を巻き起こすような、それだけのエレメントとして与えてしまおうじゃないかということなんですよね。

熊谷 今の私の考えでは、そういう漢字だけを子供にパッと見せるよりは、一つの物語を文章で、絵もきれいでね、それでその中に漢字がパッパッと浮かんでいるというようなのを見せたほうが母親も楽しいですし、子供もいい思い出になるんじゃないかしら。

井深 いや、そこら辺が、間違ってきたことだと思うんです。これは超能力と言っちゃ悪いけれども、似たような漢字ばかりを並べて、パッと見て、パッと悟る、そういう感覚というものを養成しようと思えば早くないといけないんですよね。

熊谷 なるほどね。じゃ、ゲームでやるわけですね。

井深 もちろんゲームですよ、これは。それが、後になって覚えようと思ったら、これはもう大変なことになるから。

でも、先生のおっしゃることは非常に良く分かりますね。心というものがその辺には入ってこないということになるんですけれども、これは扱い方でね。お母さんの心が、愛情を持ってやっていさえすれば、そういうものは育っていくだろうと。漢字だけじゃなしに、化学方程式とか、亀の甲の相当ややこしいものなんかも一遍の覚えちゃいますからね。だから、そこで意味であるとか、そんなことは後回しで。

熊谷 私なんかふっと先生から難しい漢字のお話を聞くと、ゲームということを考えないで、こんなちっちゃい子にお勉強は大変だなという感じ、これは一般の常識なんでしょうね。

井深 だから、そこがね、パターン教育ということがなかなか分かってもらえない。

熊谷 なるほどね。

で、今は幼児開発協会の、母親研究員の方がそれをなさっていらっしゃるんですね。

井深 やってます。

漢字のパターンで、まず字が好きでしようがないということにしちゃうわけですね。そうしたら、もう自分で本を読み出しますからね。そのときに与える本を、学校か、お母さんが黙って置いておけばいいわけですよ。ニキーンさんだったかな。まだ学校へ行かない子に、中学校の教科書を黙って、おとぎ話の中へ入れておいたらね、一生懸命それを読んじゃった。おとぎ話も何も区別ないんですよね。だから、そこに芸術心を感じるとか、なんとかというのは大人のひとりよがりかも分かんないですよ。

熊谷 でもね、先生、鈴木メソッドでもクライスラーの演奏の世界最高のものを与えていますでしょう。ですから、この漢字教育でも、世界最高の漢詩だとか、そういうやっぱり大人の目で見ると、非常に素晴らしいと感動できるものを子供に 子供の感動というのは後でいいんですけど、後になって感動するであろうというものを与えたほうがよろしいですよ。

- 井深** だから、今、1歳以下の子供に、「勇猛果敢」であるとか、「誠実」であるとか、「愛情」であるとか、「犠牲」であるとか、そういう字を与えたんです。
- 生まれたときからクマちゃんを与えておくとね、垢でもう真っ黒になったクマを手放せない。クマと漢字とね、どこがどうなんだろうという、こういう問題になるわけなんです。だから、一番抽象的な、あるいは宗教心であるとか、信仰であるとかというような、後になって一番つかみにくいものを、まず最初の時期に与えておこうじゃないかという、そういうつもりなんですよね。
- 熊谷** なるほどね。
- 勘でもって、あるパターンを学習して、それでますます勘が研ぎ澄まされてという、その勘の養成ですよ。
- 井深** そうなんです。右脳の養成ですから。だから、芸術心もそこから出てくるし。理屈で芸術心なんてのは、伝えられるわけじゃないんですよ。
- 熊谷** 今、子供向けの絵本は全部平仮名だけというのは、あれはまず直さないといけない。私の息子の場合はね、小学校1年生に上がったときに、恐竜に非常に興味を持ってましたから、『大昔の世界』という、厚い本で、漢字まじりの文章が書いてあったのをぼろぼろになるまで、丸暗記するくらい読んでましたね。
- 井深** 興味があるものがありさえすれば、自分で開拓していきますね。
- 熊谷** 読んでいくんです。それで、しまいにはもうその本は全部覚えちゃうんです。1ページめから終わりまで。だから教育というのは、やっぱり親がこれに興味を持たせようと持っていくより、自分が見つけた興味というものが1番…。
- 井深** それにはかなわないですよ。
- 熊谷** だから、興味を持つために、井深先生のパターン・ラーニングの漢字を覚えさせていくというのは、1つのステップかもしれませんね。
- 井深** まず、漢字を覚えておけば、自分で本を読みましてね、その中から、自分の好きなものというのは探し出せていくだらうと思うんですよ。これを音楽でやっていくとか、いろんな方法もあるかもしれませんが…。
- 海外へ行っている子弟で、1番追いつかないのが漢字なんです。4、5歳になって漢字を始めたんじゃ全然だめなんです。どうも言葉が定着しちゃうと左脳が強くなっちゃうんです、理詰めになっちゃうんですよ。
- 体育とか芸術とか宗教心というのは、言葉の定着する以前に入れとかなきゃ、「神様って本当にいるの？」ということになっちゃうと、もう私は手おくれだと思っちゃいます。仏様であるとか、先祖の霊であるとかなんていうのは、理屈抜き、言葉なしのときに身につっちゃうというのが本当のことだらうと思うんですがね。私は、そういうところから本当の科学的な発想というのも出てくるんだらうと想像しているんですけど。そういうものなしに、科学する人というのはやっぱり底が浅いと言わなきゃならないと思う。

自分で拓いた…

熊谷 井深先生は非常に創造的なお仕事をずっとなさっているんですけども、幼児期にはどういう育ち方を…。

井深 母親だけだったし、そんなお金持ちじゃなかったんだけど、好奇心を満足させることには、なんでも割にやらせてくれましたね。

アマチュア無線なんかやろうと思っても、何にもないんですよね、よその人がやらないことだったから。すべて自分でつくらなきゃならなかったですからね。今みたいに、秋葉原へ行って何でも買ってきて組み立てるのは違いますから。その時代の一緒にやった連中というのは筋金通ってますね。だから、自分でつくるものだということですね、結局。

熊谷 音楽なんかもお好きでいらっしゃいますでしょう。

井深 これは私の母親が、どういうわけだか知らんけど、耳が非常によくてね。私の家にはお琴しかなかったんだけど、すぐに調子を普通の西洋音楽の音階に直して、それで唱歌の練習でもなんでもしてくれたんです。お琴の先生の調弦をやるんでも、かわりによく自分がやったそうですから。

熊谷 先生はお琴とかバイオリンとかは…。

井深 いや、全然。やらなかったのが、今になると非常に残念ですね。

おわり